

■ アイデアが未来を創る ■

開催期間に大阪へは2度連れて行ってもらった。奇怪な塔が人々を見下ろし、見たことのない形の巨大な建築物が広大な敷地を埋めていた。人で溢れかえった会場で、延々と続く行列の先には、アポロ12号が持ち帰った「月の石」があった。

長時間待って、いよいよその時が来た。カプセルに入れられた鉱物は黄土色の土の塊に見えた。ゆっくり見ようにも、川の流れのような人の動きに逆らうことは許されず、横を通り過ぎただけだった。それだけでも、自分にもいつか月に降り立つことができるような、将来もっとすごいことが起こるような気になった。ワクワクした気持ちで、未来を明るく見つめていた私は8歳だった。

その大阪万博が再びやってくる。7年後の2025年、愛知万博から20年、大阪では、実に55年ぶりだ。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。コンセプトを「未来社会の実験場 (People's Living Lab)」とし、未来社会を「共創」することを目指す。人類共通の課題の解決に向けて、新たなアイデアの創造・発信を計画する。参加国が国の威信をかけて先端技術などを展示しただけの前回とは様変わりである。

新たなアイデアの提案が、昨日本校でも行われた。「Meirin Glocal Project(MGP)2018」は、地元企業でのフィールドワークを経ながら、その企業への新たな提案を試みる。2年生が総合的な学習の時間で取り組んできたものを全体発表会でプレゼンした。

Glocal（世界規模で考え、地域視点で行動する）な視点や発想は、地方の企業の経営に国連が採択した『持続可能な開発目標』(Sustainable Development Goals＝SDGs)の方向性を加える提案でなされた。中でも、ゲーム制作会社に対して、世界で起きている災害を学べるボードゲームの具体の提案は、練り上げていけば実現する可能性があるように思えた。

発表されたアイデアは、人生経験が少ない高校生が限られた時間の中で何かを提案しようともがいた結果である。多くのことを知る大人から見れば、致命的な欠陥があるかもしれない。

それでも、高校生らしい視点で改善案を提示したことは、たとえそれでほんの小さな前進しか得られないとしても、素晴らしいことだと考える。知らないからこそ、「どうせ、できっこない」と考えず、大胆な提案ができることもあるだろう。若いだからこそ、壮大な理想を掲げて構わない。

来る2025年大阪万博も、SDGs が達成される社会「Society5.0」の実現を目指している。7年後に現2年生を重ねてみると、社会人2年目のころか。若者らしいアイデアを胸に、ワクワクとした気持ちで未来を明るく見つめているだろうか。

